



補章

野上裕生——
知の軌跡



インタビュー

《知識人にあこがれて》

開発途上国に興味をもったのは、どういうきっかけからですか？

高校生のとき、私は新聞部にいまして、アジアのこと、開発途上国のこととか、日本の社会問題などについても、いろいろなところに出かけて行って話を聞いていました。

ちょうど一九七九年、韓国のパク・チヨンヒ（朴正熙）大統領が暗殺されました。私は高校三年生だったんですけども、日本のなかの朝鮮問題をやっている友だちがいて、私に「こういう本があるよ」と、途上国のこと、とくに従属理論の本を紹介してくれたんです。そこで、いわゆる世界史の流れがヨーロッパだけではなくてアジアにもあるのか、というふうに思いましたね。世界史的視点をもって途上国とかアジアのことをやりたいと漠然と思っただけです。

それで開発経済学を志したのですか？

実は、私は最初は理工系志望だったんです。けれども、いろいろ悪い行いが祟って（笑）、次第に「理工系は無理じゃないか」と思うようになって、「自分にやれることはないか」と探していたところ、高校の図書館で、岩波新書でマルクスの資本論を解説した本を読みまして、何となく世の中のことが自分にも分かりそうな気がしたんですね。

そこから、哲学とか社会思想とか歴史とかをやってみたい、と考え始めました。一九八〇年にサルトルが死にましたけれども、ああいう知識人になりたいと憧れていたんです。私の高校の近くの一橋大学にそのようなことをやっている社会学部があったので、後先の就職のこととかも考えずに入ったわけです。

ところが、社会学部に入っているいろいろ試行錯誤しているうちに、もう少し具体的な社会の問題、たとえば労働問題とか貧困の問題とか、世の中の実際的なことをやらなければならぬんじゃないかな、とだんだん転換していったんです。でも、そういうやりたい分野には先生が見当たらなかつたもので、それで、他のゼミからなかなか受け入れて



もらえないような学生さんを受け入れていた油井大三郎先生のゼミに入りました。

油井先生はもともとアメリカと開発途上国の交流史をやっていた方です。アメリカがかつてフィリピンや朝鮮に進出して植民地にしていた時代、あるいはベトナム戦争などを主に研究するゼミでした。

そこで私はゼミ生として、戦後のアジアの経済史をやりました。私の最初の研究テーマは朝鮮でした。朝鮮は日本の植民地だったのが、アメリカ軍が占領して、そこでいろいろな戦後改革がおこなわれているんですね。朝鮮戦争があつて、北朝鮮と韓国が分かれていくんですが、当時は北朝鮮に関する文書をよく読みました。

社会思想、そして経済史……。一方で、野上さんはいつも数式を解いているイメージがあります。

アジアの開発途上国の具体的な問題を考えるためには、開発経済学をやりたいと思うようになってきました。けれども、私が属していた学部もゼミも開発経済学とは離れていたのです。全くの独学、試行錯誤で勉強を始めることになりました。

経済学部の授業をとったりもしましたんですけど、一橋の教養学部では数学教室があつて、

そこで「経済学を勉強したいけれども数学が苦手だ」と相談したら、私を受け入れてくれたんです。数学書を読むセミナーに顔を出させてもらって、そのときに読んだ本が数学の専門書でした。

一橋大学は面白いところで、理工系学部に進学してもドロップアウトしてしまったり、社会科学系に転向してしまう人がいるんですね。そういう人が数学教室に集まって理工系の、今でいう分離集合的なことをやっていたんです。もう一度数学をやりたいと大学院に入り直して数理学の最先端をやる人もいますよ。

そんなところで理工系の人ができるような数学の本を読まされて、それで初めて数学のものの考え方がよく分かったんです。大学の単位とも全然関係なかったんですけれども、お世話になった先生たちとのやりとりとか、今にして思えばそれが一番役に立ったのかなあ。

《アジア経済研究所へ》

研究所に入って最初に統計部で計量モデルをやったのもそういう流れだったのですか。

アジ研に入ったのは一九八四年、初代所長の東畑精一先生が前年五月に亡くなられ、研

究所は大きな節目でした。

統計部（のちに統計調査部）に配属されたのは全くの偶然です。アジ研は当時、新しいプロジェクトをどんどんやっていかなければならない、というときで、ちょうど経済予測のプロジェクト（アジア短期経済予測事業）が始まったんです。そこに入って経済予測をやってくれ、ということになりました。全くのゼロから始めることになり、計量モデルや景気指標の作成などを独学でやった、という思いがあります。他の方たちも試行錯誤でやっています。

私が担当したのは、ASEANの主な国と韓国で、人が足りなければあちこちの国を手伝っていました。私がひとつのことだけじゃなくていろんなことをやっているのは、統計部の仕事のやり方から自然に身についたところもあるんです。

「官僚たちの夏」というテレビドラマがありました。統計部の課長さんたち、樋田満さんとか長田博さんとかと我々で「アジアはこうじゃなきゃいけない」とか「我々はこういうプロジェクトをやらなきゃいけない」とか、大法螺みみたいなことも吹いていて（笑）、とても活気がありました。古河俊一さんや坂井秀吉さんがいて、そこに経済成長調査部の方々、たとえば今岡日出紀さんや横山久さんなども出入りしていて、夜遅くまでよく議論

していました。経済予測の話だけではなく、最近何か面白い研究はないかとか、なんでこんな研究が賞をとったりするのかと批判してみたり。

ただ、私自身としては「自分の専門として何をやっていくのか」というところで結構苦しんだなあと思っています。地域を研究している人は地域に張り付いてやっているからいいけれども、経済予測をやっているとつぶしが利かないというか、自分の中心が作りにくいような気がして悩んでいました。

この時期に大学院も続けていたのですか。

一橋大学の大学院に籍を置いて、統計部で縁のあった先生にお世話になりました、開発途上国の人口統計とか貧困統計をもう少し深く研究するようになりました。

その頃お世話になったのは、今はもうアジ研から東大に移られた池本幸生さん。私の師匠ともいべき方で、勉強の仕方から論文の読み方まで随分教えていただきました。

もともと大学の社会学部でいろんなことをやって、アジ研の統計部でいろんなことをやって。一つの専門分野からはみ出ることに興味があったんですね。ですから、普通の経済学者からみるととても扱えないようなテーマ、正論では割り切れないような分野、たとえば

差別問題とか貧困問題とか、それから環境問題もある程度そういう部分がありますが、そういう問題に関心があつて、だんだんと広がつていきました。

経済学部で経済学をやつてきた人は、経済学的な発想でものを切つてしまふんだけれど、私は何せ試行錯誤で色々なルートをたどつてきたので、経済学から外れたようなことが頭に出てきてしまうわけです。

後に、アマルティア・センの本を池本さんと一緒に翻訳していますね。

お世話になつた池本さんが、その頃ノーベル経済学賞をとつたアマルティア・センの本と一緒に翻訳してみないか、と声をかけてくれました。それが『不平等の再検討―潜在能力と自由―』（アマルティア・セン著、池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳、岩波書店、一九九九年）です。

翻訳するにあつて、著者のアマルティア・センとか国連開発計画の「人間開発」という考え方とか、開発のなかで基本的人権をどう考えるかとか、貧困をどうみたらいいのかとか、一生懸命もう一度勉強しました。

アマルティア・センさんは天才的な人で、ルネッサンスの知識人みたいな人ですので、

それを理解するためにギリシャ哲学とか仏陀とか、聖書も読みあさりました。もちろん経済学的事情も大事です。そうするなかで、国際開発のなかで使われている開発援助の考え方、ロジックが分かってきました。

統計部の時代には、開発経済学の教科書も作られています。

一九九四年ごろ、所長の発案でアジ研で開発経済学の教科書を作ったかどうか、ということになりました。理事だった野中耕一さんが「それをやるなら野上君にやってもらった」といわれ、そこで教科書を作る研究会を担当することになったんです。野中さんは私が入所した時の統計部の部長さんで、文芸のことがわかる方でした、文章修行をみっちりやられました。その頃のことを覚えていてくださったのでしよう。

そこで、今までやっていた数学的なことを勉強し直しましたね。アジ研の研究者の方々を組織して『テキストブック開発経済学』（朽木昭文・野上裕生・山形辰史編、有斐閣、一九九六年）を作りました。

今から思うと、これは大ヒットでした。二〇〇四年に改訂版（新版）が出ました。いまだに売れているようですね。

《文献解題の積み重ねから生まれるオリジナリティ》

野上さんは、ほんとにたくさんの本を読まれていますよね。

いやいや、そうでもないですけど（笑）。私はもともとの出が社会学部で、知識人志望だったので、一種の學術研究というか、学芸に憧れていたんです。まったく独学の形で始めざるを得なかったので、本とか論文も試行錯誤しながら自分で発見していくしかなかったんです。

そうしているうちに思いついたのが、本の書評を引き受けて、それを再構成して論点をまとめて、それを集めて新しいものを作っていくことです。今でも英文機関誌 *The Developing Economies* でブック・レビュー（書評の書き手）をやっていますが、あれは私には最もふさわしい仕事なんじゃないかと思うんですね。

欧米だと、たとえば文学作品がでると文芸時評を書く人がたくさんいるわけですけど、私もそんなふうに書評を積み上げていって、そこで「文献解題的なものからオリジナルなものへ」という形で勉強していったんです。今の若い経済学部出身の方は全く逆で、ちゃんと先生がいて、テキストがあつて、授業を受けて。私の場合は、勤め先で独学で仕

事の合間に、という感じでしたんで、なるべくそういう形で勉強したわけです。

ただ、そこで感じたのは、一種のストーリーリーとしての、読み物としての面白さが、開発経済学にはもつと必要なんじゃないか、ということなんです。起承転結ですね。それを狙っていたところが、意外なことに、後に『テキストブック』のような普及書を作るときに役に立ったように思います。

ふつう研究者は先行研究に対して自分の独自性を出していくと思うのですが、野上さんの場合は、評論のような形で議論を再構築していけるんですね。

開発経済学でも、ある人が書いた論文が非常に大きな反響を呼んで、一つの研究領域が広がっていくことがあります。それが後になってどういう意味をもったのかということを経験しておくことは、新しい研究を作っていくうえでは必ず必要だと思っています。自分では、私はそういうことをやっていると思っています。年齢ももう五〇歳なんで、最先端のことをやるというよりも、広い歴史的な文脈のなかで「なぜ今これが必要なのか」を解説するのが自分の役割なんじゃないかな、と思っています。

『開発経済学のアイデンティティ』（アジア経済研究所、二〇〇四年）もそういう思いから生まれたのですか。

これは実は、原稿がほんとにどう書いてもグチャグチャな文章にしかならなくて、もうあきらめようかと悩んでいたときに、ある晩、「俺は何を書こうとしていたのか」と自分に問いかけて、パッと『開発経済学のアイデンティティ』という本を書いたらどうか、と思いついたんです。

つまり、ある学問ができてくるときには、最初から「学問」としてあるわけではないんですね。歴史学にしても地理学にしても、いまのような形をとるのは割と新しく、二〇世紀のことなんです。その時代、この学問のアイデンティティはどこにあるのかということを一生涯議論していったんです。

開発経済学にもそういう流れがあります。そこで、普通の経済学とは違う、開発経済学自身のアイデンティティ、というか、「これがなければ開発経済学の論文とはいえない、といえるものは何なのか」というものをまとめてみたら？ よしやろう、と思いついたんです。そしたら、ほとんど三日くらいで初稿ができちゃったんです。そういうものです。

理論家の人はそうなんだそうです。最初にアイデアができた段階で、論文の基本はで

きちちゃっている。

ですから、今アイデアス（アジア経済研究所開発スクール——IDEAS）の学生さんたちも修了論文を書いています。皆さんにお薦めしているのは、「自分の論文に、これだ！と思うタイトルをつけてみたら」ということです。題名というのは、その人が書きたいことすべてを一瞬にして表すものなんです。タイトルを思いつけば、論文はほぼ出来上がっているも同じ。後はデータを集めたりパソコンを回したりの肉体作業ですね。

論文の審査が来たときに最初に気になるのが論文のタイトルです。「〇〇における××に関する一考察」とかいうタイトルになっていると、ちょっとこれは……と思っちゃう、うん（笑）。たとえば「大佛次郎賞」を受賞した著作を見てみると、タイトルが非常によく作られている。見たとたん「あ、この本買いた〜い」と思っちゃう。

《『人間開発報告書』を読み解く》

その次に書かれたのが『人間開発の政治経済学』（アジア経済研究所、二〇〇七年）です。

個人的にずっと思っていたのは、国連開発計画（UNDP）で出している「人間開発」と

という理念がありますけれど、それにかかわる貧困とか差別とかジェンダーといった問題群をどうするか、ということでした。

その延長でいくと、つい最近では森壮也さんと障害問題の研究会（「障害者の貧困削減…開発途上国の障害者の生計」）をやりました。環境問題についても科研費の研究会に参加して、「持続可能な発展」について書きました。佐藤寛さんがやっているいわゆる社会開発ものを、経済学のバックグラウンドからみることもしました。

池本幸生さんとアマルティア・センの翻訳をしたときにも、人間開発とか貧困とか、開発援助の考え方を勉強したわけですが、ところが、どういう人たちにこういう概念が受け入れられているかが、意外にも固められてないような気がしたんです。

そこで、「人間開発報告書」や人権とかジェンダーが、どういう人たちに支持されて受け入れられてきたのかをみてみよう、ということ、まとめていったのがこの本でした。

この本もどうなることかと思ったのですが、査読者の方などからアドバイスをいただいたので、ひとつのまとめりができたのでよかったと思っています。この本ができたとき、一〇年くらい考えてきたことがようやく書けたような感じがして、力が抜けてしまいました。

「人間開発」研究で培われたものが、障害やジェンダーなどの幅広い研究に役立つているのですね。この本には大量の文献が引用されています。これを全部読まれたのですか。

この本は力が入りすぎちゃって。実はそれから眼精疲労になりました（笑）。

何か調べようと思ったときに、文献や資料をできる限り集めて、並べてみる。そうすると、こういうふうに過去にいられたことにはこういう意味があったのか、とようやく分かってくる。

このやり方が身についたのは、昔、経済予測をやっていた時期です。景気動向を読むために一番重要なのは、新聞記事などの細かい情報を積み上げていつてクロノロジーを作ることでした。この時点で円高になったから、それが今になってここに影響している、ということがそれで初めてわかる。この作業をずいぶんやらされたんです。今も『アジア動向年報』をやっている人たちがやっているやり方です。

そのやり方を、研究論文を集めたり読むときにも同じようにやっていきました。ひとつの論文を読んで、そのベースになっている資料やデータ、引用文献を集めてみて「どうしていまこれがここに出てきたのか」を調べる。その引用文献に引用されている文献を集める、というふうに、できる限りのものを集める、ということをやりました。

大学院で私のお世話になった先生が経済統計の専門家の方だったんです。ものすごい量の資料を集めて読んでいました。たとえば、日本がアジアを占領した大東亜共栄圏、そのなかの朝鮮、台湾、パプアニューギニアなどのGDPを推計していたんですが、ありとあらゆる統計資料を集めて、それだけではなくいろいろな文献、旅行記や小説までも広く読む。「統計でこのくらいのコメ消費量の値が出てくるけれど、ほんとうに合っているのかな」と当時の小説やルポルタージュを調べる。そうやって統計数値が妥当なものかどうかを確かめていく。歴史家は、とにかくいろいろなものを読んでいます。そういうやり方が身についたように思います。途上国の計量モデルをやっている、土地勘がないとダメだから、一種の職業病みたいなものです。

学部時代に油井先生の研究室で資料の扱いをやらされて、また統計の勉強でお世話になった先生にも一種の歴史的な仕事を仕込まれました。今は分野を外れたようにみえますけど、二〇歳代に読んだものは今でも重要なのかなと思います。

《統計指標の背後にある歴史的・社会的な文脈》

『アジ研ワールドトレンド』で新連載「すぐに役立つ開発指標の話」が始まりました。

新しい連載を、ということでは、自分にできることをまず書いてみようと思ったのがこれなんです。日常的によく使われる物価指数や株価指数から、新しい「人間開発指数」（HDI）といった指標まで、毎回読みきり形式で解説していきます。その際に「何でこんな指数が出てくるようになったか」という歴史的な行きがかりも解説しています。

実は、独学で経済学を勉強していたときに、実際、経済学なんてすぐに面白いと思うもんじゃないんですよ、そうでしょ（笑）。「何でこんなことを勉強しなければならないのかな」と疑問に思っていたので、こういう理論を作った経済学者というのはどんな人たちなのか、というのを逆に調べて、それで自分に興味をもたせることをやっただけですね。そうすると、非常に面白い人が多いことがわかりました。

どんな理論でも統計指標でも、それを作ったきっかけには現実に迫られた問題があつて、それを解決していくなかでデータが作られてきたんだ、ということもわかりました。それだったら、経済学の話聞くよりは、見よう見まねで統計を加工してみた方が経済学のコ

とが分かるんじゃないかと思っただけです。自分でデータを集めてエクセルで計算してみようという人がいたら、そういう人に役立つものを書いてみよう、と思いました。

一話完結で全二四回の連載です。全部続けば「アジアを見る眼」にまとめられるんじゃないかと思っています。

私がお世話になった何人かの先生が、日本の統計データの歴史の変遷について書いた本を何冊か送ってきてくれました。自分でもそういう本を書いてみたらどうかと思っ、これまでのもとのつもりで書き出したところです。

いや、しかし、ひとつ書いたと思っただけすぐ校正が来るし、分かりやすく面白く読み物となると、起承転結をつけてオチをつけなければならぬし。一方で、学問的な正確さは必要だし、具体的なデータも紹介しなければならぬし、それでスペースが小さいとなると、結構大変ですね。いや、連載漫画をやっている人が体を壊すのが分かる気がします。

開発指標というのは何種類くらいあるんですか？

後から後から出てきます。

昔からの指標ですと物価指標がありますが、最近では「途上国ではどのくらい民主主義

が発展しているのか」とか「どのくらい人権が守られているか」などといった指標がありません。

意外と知られていないことですが、統計指標をみるうえで開発途上国に固有の注意点があります。たとえば、寿命に関するデータがそうです。同じ平均余命六〇歳の人といっても、日本の六〇歳とインドの六〇歳はずいぶん違いますよね。人口のなかでどの部分を老年期とみるか、その定義を統計のなかで具体的に考えなければなりません。たとえば平均余命が八〇歳だと、そこから二〇年引いた六〇歳以上を老年期とする、という考え方が一般的にはあるそうです。そうすると、インドでは四〇代後半は相当シニアに当たる、日本の六〇〜七〇歳に当たるとみられなくもないんです。

私はそういうことに非常に興味をもっていました。コミュニテイとか社会の文脈に応じて統計をみていくことに興味があるのです。

《計量経済モデルを蘇らせた》

これからの研究関心は？

私が統計部にいた頃、植村仁一さんが入ってきて、一緒にマクロの計量経済予測モデルをやっていたんですが、今ではアジ研で計量モデルをやっている人は気がついたら植村さんだけになっていました。これまで蓄積してきたデータやプログラムの見直しをいま始めています。

アジ研の旧統計部はここまでやってきたんだということを、なるべく関係学会の共有遺産として計量モデルを出したい。アジ研の産業連関表は定評がありますが、計量モデルの方も一種の統計資料として公開できるようにしたいと思っています。それに私自身、統計部でたくさんの人たちにお世話になったので、その人たちの仕事を今の若い人たちに残したい、という気持ちもあります。

当時のプログラムはかなり古いものですね。

その頃のプログラムは特異な状況でやったものが多かったのですが、今は汎用プログラムがありますから、それに接近する形にした方が使いやすい。そのために研究会を立てて予算をとって、植村さんと一緒にやっていこうと思っています。

逐一アジアの経済動向を観察していて、よくレファレンスで「アジアの経済はどうなっ



ていますか」という問い合わせに答えていたのが、動向年報の人たちと統計部だったんです。他にない力を発揮できるのがアジ研だと思いますので、そういうことに役立つデータベースができればいいと個人的には思っています。データなどが拡散してしまっているので、もう一度復旧するのは結構大変だと思います。

《最後に一言》

私は、一方では経済予測とか統計とか開発経済学の仕事をやっている傍ら、もう一方では社会的な思想とか文芸をやってきた人間です。そういういろんな側面をもった人間がこういう研究所に一人いる、というところが私の存在意義ではないかと思っています。

ひとつの領域よりも、いろんな領域の接点を作る、いろんな領域を専門的に研究している人たちを集めてきてひとつの解説書や教科書を作る、そういう仕事に向いているのではないかな、と思います。

若い研究者の皆さんは、正論では割り切れないような、あいまいな領域にも首を突っ込んでやることも、心がけてみたらいいのではないでしょうか。

二〇〇九年二月二四日（聞き手 泉沢久美子）